

## 卒業を記念した一枚の木彫 ～オルゴール箱づくりを通して～



卒業制作として木彫に取り組みました。平刀や丸刀など、彫刻刀の使い方を学習することで、それぞれの刀の役割や効果、使い方を知り、イメージした彫りに合う彫刻刀を選ぶ必要があることに気づくことができました。また、刃の向きや板にあてる角度によっても、削られた面の表情は異なることを知ることで、技術を身につけ、その技術を使いながら彫る必要があることにも気づくことができました。彫り進める中で、「うまくできなかった」という声も聞こえました。どこがうまくいかなかったのか、なぜうまくいかなかったのかを考える機会を設けました。振り返り、改善点を見出すことで、「ちゃんと切り出して溝を入れたから、今度は大丈夫だったよ」

「ここは危ないから、きちんと溝を入れてから、なぞるように彫る」と、子どもは実際に取り組んだことをベースにして、次の表現につなげていました。確かな見通しを立て、実際に彫る。作品づくりに向き合う時間。そこには、子どもが刀を使って技を駆使して働きかけ、作品から働き返される瞬間があります。イメージ通りにいったことも、反対に思うようにいかなかったこともあります。そうした一つ一つの体験の中に、自分だけの作品を形にしていく充実した時間があったのでしょう。

### 「ひと削りから」

僕は 彫刻刀を使って 花の絵を持っています これまで 三角刀や 平刀などを使ってやりました。三角刀で目印をつけたところを深く掘りました。しかし、丸刀で削りすぎたことがありました。でも、なんとか頑張って花の模様を彫っています。花の模様は、削るところがたくさんあります。今までやってきたことを思い出し、めげずに彫ろうと思います。失敗してしまったところもあるけれど フォローするように持って行けば カバーできると思いました 次のところめげずにやって完成させようと思います この経験からめげずにやり丁寧に精一杯出来るだけやろうと思いました ひと削りを大切にしようと思いました。

一連の経験の中で「ひと削り」にかかる意識が変化しているともいえます。刃の角度や、指先にこめる微妙な力加減など、体と意識が一つになった「技」を駆使する感覚が育っていたと思います。

彫刻刀で立体感のある作品へと木の板が姿を変えていきます。子どもたちはやすりがけを始めました。2種類のやすりを使い、作品を整えます。つるつるの表面になっていくにつれて、充実感にあふれていく子どもたちの姿がありました。

せっかく時間をかけるのなら、自分が誇れる作品にしよう。せっかく作るなら、自分が満足する作品にしよう。そう思って最後の一分一秒まで磨きました。

こうして、子どもたちは時間が許す限り、納得できる作品づくりと向き合いました。製作期間は2か月。毎日少しずつ彫り、磨き、色を重ねた作品は、小学校生活の記念の一枚となったはずです。

自分の体や感性を通して、実際のものごとに関わり、自らを更新させてきた、この小学校での学びが、この一枚につまっているのではないのでしょうか。



完成したオルゴール箱に、オルゴールを入れて聴きました。

自分でいうのもなんだけど、箱がとっても上手くできたと思います。この箱を見ているだけで、楽しい気持ちになってきます。この最高の出来になったのは、先生のサポートのおかげです。ありがとうございます。家に帰って初めてオルゴールを聴くと、優しい音色が聞こえてきました。聴いているうちに、だんだん駆で流れるような感じだなと思いました。もう一度と聴くうちに、何度もくり返し聴いてしまいます。これは私の一生の宝物です。でも、だんだん卒業までにすることが終わっていきます。さみしい気持ちになります。卒業まで、一日一日を大事に過ごしていきたいです。